

## English Novelists in Oblivion —— Hubert Crackanthorpe (Ⅱ)

清水 隆

佛蘭西 naturalisme の簞手で、「居酒屋」(*L'Assommoir* 1877) や「ナナ」(*Nana* 1880)、「壊滅」(*Le Débâcle* 1892) 等の大作で名高い Emile Edouard Charles Antoine Zola (1840–1902) の数多い作品群の中に、「制作」(*L'Œuvre* 1886) とする、比較的認知度の低い佳作が在る。藝術家の心理の病的な部分を活寫するこの日常生活を描き出す小説の plot は、以下の様なものである。

hero は「居酒屋」のジュルヴェーズ・マカールの最初の夫との間に出来た長男クロード・ランチェで、母親との貧困の極みから脱出して、自らの画才を理解して呉れる故郷の老人の許で、繪画の修行に勤しむ内に、孤児のクリスチーナと愛し合い同棲するが、必死の努力にも拘らず繪の才能は少しも伸びず、遂に發狂して、神秘的な薔薇色で描きかけた理想の女性像の前で縊死する。一方、クリスチーナは、それ迄の執拗な争いに疲れ果てて、クロードの遺骸の足許で卒倒して了う。

*Wreckage* に収められた第二の中篇小説 *A Conflict of Egoisms* の主題は、將に、Zola のこの作品の換骨奪胎を目指したものと斷じて良く、第一作の *Profiles* が the Goncourts の作品の影響を色濃く受けて居たのと同工異曲であり、hero が画家から小説家に變った丈で、theme は ‘a woman's increasing jealousy of her husband's work’ と ‘the man's increasing emotional and sexual distraction’ (David Crackanthorpe : *Hubert Crackanthorpe and English Realism in the 1890s*, University of Missouri Press, Columbia & London, 1977, p.69) と粗同様と言える。この事實は、Hubert Crackanthorpe という奇才が、その小説家としての短い career を自らが信奉する大家達の作品の「摸倣」から始めたと考えて差支えなく、作品を積み重ねて行くにつれて、當然の

事乍ら、独自の *realist* としての境地を築いて行くことになるのである。謂わば、習作の第二弾として、*A Conflict of Egoisms* を、*Profiles* と同様に、逐章毎に精査して、この作家の *realist* としての發達の萌芽を確認して見たい。

## Chapter I

Still Oswald Nowell went on writing, covering page after page with a bold, irregular scrawl. Since breakfast he had been there, and large sheets of paper littered the table and the floor around it. In front of him, by the inkstand, was a plate filled with half-burnt cigarettes.

(*Wreckage*,p.55)

文字通り寢食を忘れて、執筆に明け暮れる hero を描出する冒頭の部分である。彼は、‘his canvas shirt unbuttoned at the throat, his coat discoloured, and worn quite threadbare at the elbows, his thin, greyhair dishevelled as after a sleepless night; his eyes with the dull look of brain exhaustion in them.’

(*Ibid.*,p.55) と藝術家特有の無頓着振りで、更に、‘... and once more sat down at the writing-table; with the reckless pluck of a blood-horse, struggling on for a few minutes longer. But in vain. He was dead beat.’ (*Ibid.*,p.56) と思い通りに筆が進まず呻吟する。約拾二年書き續けて、これ迄に五冊の小説と一冊の短篇集を世に問うたのだが、誰に師事することもせず、又文筆仲間と交わることも望まず、従って後繼者を持つ譯も無く、‘he quite stood alone.’ (*Ibid.*,p.56) の状態なのである。若い *realist* 達に *idealist* として挑む等と批評されることにも全く無関心で、出版した殆どの作品は ‘a *succes d'estime*’ (*Ibid.*,p.57) であり乍ら、實際の販賣部数は伸びず、僅かに最新の一冊のみが *idealist school* の chief の作として版を重ねたのみと言う現状なのである。現在 the Thames を見下す Chelsea の丘の flat に獨居して、その ‘love of solitude’ (*Ibid.*,p.57) を満喫して居るかの如くに思われるが、實は永年の ‘isolation’ が習性となり、他人との交わりに病

的な迄に神経質になって居るのである。若年の頃に経験した苦い失戀の痛手からかと想像される女性と全く無縁な現在の生活も、その様な臆病とも言える程の *weak-minded* の所爲と考えられよう。

In like manner, his whole view of human nature was *a generalised, abstract view: he saw no detail*, only the broad lights and shades. And, since he started with no preconceived ideas of prejudices concerning the people with whom he came in contact, he accepted them as he found them, absolutely; and this, coupled with the effects of his solitary habits, gave him a supreme tolerance — the tolerance of indifference.

(*Ibid.*,p.58 Italics は筆者)

‘*a generalised, abstract view*’ の持主故に屢々 ‘*he saw no details.*’ という結果を生み、それ故に若い *realist* 達から單なる *idealist* と評される、將に、宜なる哉であろう。

## Chapter II

heroine Letty Moore の美事な迄の變容振りを活寫した章である。實年齢より老けて見える骨格逞しい Letty は、約八年に及ぶ苦闘の末、漸く ‘*independence*’ (*Ibid.*,p.59) を獲得する。

Her childhood and her girlhood, till she was nineteen, had been spent with her father, who was sub-editor of a halfpenny evening daily — a joyless, homeless existence, moving from boarding-house to boarding-house. Then one dirty November evening brought the first turning-point in her life. An omnibus knocked down her father as he was crossing the Strand, and the wheels passed over his chest. Death was quite instantaneous. Letty gave way to no explosion of grief, only she uttered a little gasp of horror at the sight of the distorted, dead face.

(*Ibid.*,p.60)

父親に對して特に強い愛情を抱いて居なかった Letty は、彼の死に関しては左程悲しみを感じなかったが、唯遺されたものは未拂いの僅か一ヶ月分の給料丈と知って、強い shock を受け、早速に自活の道を求めて努力を開始する。‘gawky, overgrown’ (*Ibid.*,p.61) な Letty は、その後約六年間 Fleet Street の粗末な社屋で、‘carrying messages, copying and answering letters’ (*Ibid.*,p.62) 等の仕事に明け暮れたが、臆てその持ち前の與えられた仕事への全力投球振りと頭の回轉の素早さとが評價されて昇給し、その後 ‘a lady weekly’ の副編集者の地位を確保、更に根氣の良さと弛みない努力とに依って、編集主任の死の後を受けて編集長となる。斯くして現在の立場に満足して、仕事一途の日々を送るが、然し臆て年齢を加えるに従って、自分と他人を比較する心境に至り、人生には仕事以外に多種多様な生き方が存在すると悟るにつれて、女性としての ‘awakening’ (*Ibid.*,p.62) が急速に進む。それ迄夕食後就寝迄の自由な時間を唯 typing や繕い物にのみ費やして來たことに疑問を抱くと同時に、或る夜不圖住居の薄汚れた状態に氣付いて嫌惡感に襲われた Letty は、一週間後 Chelsea の丘の flat (上階に Oswald が棲む) に轉居し、それと同時にこれ迄氣にも留めなかった室内の裝飾や家具の配置等に異常な程の興味を抱き始める。

Sometimes on her way back from the office, it would occur to her that the looking-glass ought to be hung higher or lower, or the tablecloth on the square table would look better on the round one; that hastening home, and without waiting to take off her hat and gloves, she would at once try *the effect of the alteration*.

And when everything was done, the clean, new chintzes, the stiff, white muslin curtains, the Japanese fans, and the hundred and one other blight-coloured knick-knacks on the wall, instead of delighting her, as she had expected, made her feel awkward and ill at ease. Her well-worn work-a-day clothes seemed out of place in this new interior, which made their deficiencies appear all the more glaring. In her daily work she had of

necessity acquired a considerable knowledge of the fashions, but to use that knowledge for the adornment of herself had never occurred to her before.

(*Ibid.*,p.p.63-64 Italics は筆者)

女性の室内の整備に関する作家の微細に亘る realistic な描寫にその才氣を感じ取ることには、後章に於ける同様の事実と併せて検討するとして、自らの身邊を飾り立てると謂う従來の Letty の行動からは考えも付かない嗜好の變化は、將に、‘self-admiration’ (*Ibid.*,p.64) の極致と言えよう。加えて、見逃してはならないのは、‘the effect of alteration’ と言う性癖が彼女に内に潜在して居る事實である。この事實こそが Oswald との結婚後に増進して、彼を自滅に追いやる原因となるのであるが、これも後章に於ける課題としよう。更に、この時點で Letty の關心の對象は ‘inferior, sentimental novels’ (*Ibid.*,p.65) の濫讀に向けられて、食事中も書物を手放さず、‘the habit’ (*Ibid.*,p.66) は益々昂じて、遂には讀後内容を記憶して居ない程の分量を讀み續けた結果、自らにも正體不明の ‘fits of dissatisfaction and depression’ (*Ibid.*,p.66) が生じ、この種の書物の定番とも言える男性からの甘い愛の囁きにのみ強い憧憬の念を抱き始めるのである。そして、‘unknown newcomer’ (*Ibid.*,p.66) の出現を現實に待ち望む心境に到達してう。

But surely one day, now that she was well dressed and smart — yes, it seemed that it must be, when she thought of the others, dull and ugly, who were married. And the care with which she dressed herself each morning was for the sake of this *unknown new-comer*, for whom she was waiting with vague expectation.

(*Ibid.*,p.66 Italics は筆者)

そして自らの寂莫とした現状に想いを致す時、それ迄の束の間の表情の輝きが困惑へと波の様に揺れ動き、臆て言い様の無い寂寥感から絶望

への淵へと陥ちる結果を招來して了うのである。

### Chapter III

第三章冒頭の降雨の scene の描寫は、前章の Letty の室内の realistic なそれと共に作家の realist としての才能を鮮明に示して居る。

The shower had been a fierce one covering the roadway with a thick crop of rain spikes, filling the gutters with rushing rivulets of muddy water; now, through a rift in the ink-coloured clouds, the sunlight was filtering feebly, and the swirl of the downpour had subsided to a gentle patter.

(*Ibid.*,p.p.66-67)

その realistic な筆致で、初對面の男女の心理を適確に描き、特に、女性の男性に對する微妙な心境の變化を精確に追求する技法は、この作家の將來性を予感させる。

office からの歸途、突然の降雨に遭い、暫時の雨宿りの爲に駆け込んだ軒先で、Letty は初めて Oswald と出逢う。自分と同じ Chelsea の丘の flat の上階に住み、言葉こそ交わさないものの、時折階段で顔を合わせる男性であると認識する。Letty が最初に Oswald Nowell を意識したのは、彼女が讀書にのめり込んで暫くした頃、書店で彼の著書を眼にした時で、それ以來 maid に命じて flat 内で蒐め得る彼についての情報の總てを逐一報告させて居た事実が存在する。詰まり可成り以前から Letty の胸の中に Oswald Nowell が棲みついて居たのである。軒先での會話の際に、彼女の質問に對して Oswald が満足に応えないのに業を煮やし、‘Why did he say something?’ (*Ibid.*,p.68) と、持前の氣の強さから思わず相手を詰ろうとする氣持を辛うじて抑えた Letty は、濡れた衣服の儘で此處に居るのは身體に良くないから早く歸ろうと言う彼の言葉に、絶えて久しく接した事のない ‘a quiet familiarity’ (*Ibid.*,p.69) を實感して、直前の不満を立ち處に氷解させる。Oswald に對して抱いて居た ‘the uncomfortable

edge of the strangeness' (*Ibid.*,p.70) が徐々に消滅しつつあるのを自覚した Letty は、彼の著書の總てを讀破した事實を告げる事で、'the weight of heavy thing' (*Ibid.*,p.70) が一気に消し飛んで、より一層彼に親近感を憶える自分を意識すると同時に、彼の著書に對する自分なりの讀後感を披瀝するに至って、自分でも驚く程精神的に昂められたと思ひ込む。

She was unconsciously charmed by this new pleasure of listening to her own talk; oblivious of all else, she walked on by his side, till the sight of the familiar, red-brick doorway abruptly brought back the sense of reality.

(*Ibid.*,p.71)

言う迄もなく彼女のこの昂揚振りは明らかに一人よがり、Oswald にして見れば、この時點に於いては、Letty は同じ flat の住人で、自分の作品を第一次性讀者の一人として捕らえて居るに過ぎないとしか考えられなかったのであろうが、讀書を intelligence の symbol と錯覺し、その著者を等身大の人間として見る事なく、何の疑念も持たずに崇拜の對象と看做して了う Letty Moore にして見れば、文字通り産まれて初めて出逢った理想の男性として Oswald Nowell を美化して了ったのである。この男女の間のお互いに對する認識こそが、その後の悲劇の最大の原因となる事に留意して置く必要がある。

## Chapter IV

この章は、些か melodramatic な出逢いから始まり、その mood が章の終り迄持續されるのだが、realism 基調の小説に於ける melodrama 性と人間心理の必然性との問題については、筆者の主要な研究對象である George Robert Gissing (1857-1903) の二拾數冊の作品の殆んどに於いて當面する事實である。この點に關しては、諸説紛紛入り亂れて收拾が付かないのが現状であるが、筆者は、極めて月並ではあるが、作家の設定した人物像を基本にして、許容可能な範圍迄は realism の圈内とする態度

を一貫して堅持して来て居る。従って、本章に於ける Oswald と Letty の行動も、二人の人物設定——自虐的な作家と自己主張の強い女性——を土臺として考慮すれば、許容可能な範囲を逸脱しては居ないと考えるのである。

翌日 office からの歸途、昨日 Oswald と出逢った Strand の一角で、今日も逢えるかも知れないと偶然を期待する Letty の女性心理は普遍性の高いものであろう。落膽して歸路についた彼女は、flat の入口で、彼女の好きな coat を肩からだらしなく下げた Oswald と再會し、思い切って午後のお茶に誘う。然し、いざ部屋に入ると、‘constraint’ (*Ibid.*,p.73) が支配して、思う様に會話が續かず、苛々する。

And more and more keenly she resented her disappointment, growing quite indignant with him because it was all so different from what she had expected.

(*Ibid.*,p.p.73-74)

自己主張と言うよりは自分勝手と評するのが相應しい Letty の一面が如實に表われる部分である。それから一週間、時折彼女は彼と顔を合わせるが、お互いの間は白けた儘で、進展は見られない。然し、Letty は直感的に彼は自分に逢いたがって居るにちがいないと獨斷する。(‘But she knew that he came out expressly to meet her.’ (*Ibid.*,p.74)) この Letty の直感が正しかった事を證明する事態が數日を経ずして惹起する。或る夜 shirt の button がはずれた儘、手は ink で汚れた儘の姿で彼女の部屋を突然訪れた Oswald は、仕事が思う様に捗らない苦衷を訴える。作家が執筆上の停滞を嘆き、周囲の思惑を無視して自分本位に振舞う様子は、Gissing の作品の多くに散見されるものと同様であるが、彼を祕かに想い續けて居る Letty を ‘There was something in this appeal which, outside her own personal feeling for him, went straight to her heart, and put her quite at her ease.’ (*Ibid.*,p.75) と、微妙な心境に追い込む効果を擧げる。一頻り嘆いた後で ‘things are much clearer now.’ (*Ibid.*,p.76) と呟いて辭去しよ

うとする Oswald は、何か手助けが出来たのかと問う Letty に、‘It is all well marked out in my mind now.’ (*Ibid.*,p.77) と告げて出て行ってさう。「何か御役に立てたのかしら」「心は決まったよ。」と言う直前の彼とのやり取りを反芻しつつ、部屋に戻った彼が再び執筆に勵む姿を想像して居た Letty の眼前に、再度突然姿を現わした彼が、‘I’ve done it, all come splendidly. Thank you, thank you.’ (*Ibid.*,p.78) と告げ、續けて、‘Would you care to be my wife?’ (*Ibid.*,p.78) と言い放っても、‘So continuously had she been thinking of him that the strangeness of his proceeding never struck her; it seemed quite natural that he should return.’ (*Ibid.*,p.78) と考えて居た Letty は、立ち處に ‘‘Yes,’’ she answered, quite easily also, not realising the situation, but knowing by instinct that there was no other answer possible.’ (*Ibid.*,p.78) と快諾する。「年四百乃至五百磅の収入で大丈夫か?」「君と居ると仕事が捗る。」「kiss しても良いか?」「それでは今度こそお休み。」斯くして、‘straight forward’ な Oswald Nowell の悲惨な生活が始まるのである。

## Chapter V

Oswald から突然の求婚を受けた直後の Letty の心境の極めて realistic な描寫を引いて見よう。

And, as for Letty, her feeling for him, sprung at first out of her own overwrought sentimental imagination, soon began to grow each day in strength and richness. Into this newborn love for him her whole being fused itself in impetuous rebellion against the life of solitude which had cramped it for so long. With a rapidity, that at first sight seemed startling, she absorbed every detail concerning him, till the whole perspective of her life veered round, everything being subordinated to its relation to him. And all these new things accumulated themselves within her, till their accumulation was painful to endure. For through his easy kindliness of manner she soon divined his supreme unconsciousness of all that the

marriage meant to her, and thus her yearning to bring herself at once quite close to him became anguish ; looming in front of her, as it were, she began to dimly perceive the barrier of his own personality, a barrier which was *the outcome of years of accumulated habit*, and which had grown so natural to him that he ignored its very existence. Yet, following a common paradox of human nature, the further she felt herself from him, the more she loved him.

(*Ibid.*,p.p.82-83 Italics は筆者)

求婚後屢々 Letty の部屋を訪れる Oswald の立居振舞に、求婚時のあの ‘fever’ (*Ibid.*,p.81) が消滅しかけて居るのを、特有の直観力で目覺く意識して居る Letty ではあったが、‘his easy familiarity, at once gentle and respectful’ (*Ibid.*,p.82) が終始變らないのを支えとして、ともすれば懷疑的になりかかる自分を抑えて居る。本来、old-maid の域に達して、流石に生活上に寂莫としたものを強く感じて居た處に、讀書がきっかけとなって憧憬の念を抱く様になった小説家が現われて、何の躊躇も無く傾斜して行った Letty にして見れば、交際が深まるにつれて徐々に姿を現わし始める Oswald の彼女にとって意外な素顔も、‘*the outcome of years of accumulated habit*’ (*Ibid.*,p.83) と割り切らざるを得ない處であろう。然し、king's Road の the Registrar's Office に二人で出掛けた丈と言う結婚の ceremony の後、階上の彼の部屋に自分の荷物を移動させる際に、「私達が出掛けて居る間に片付くわね?」「出掛けるって何處へ?」「勿論、honeymoon よ。」と言う會話の後の、“Of course — of course,” he answered hurriedly, “but where? ” There was a despairing accent in his voice, so dismayed was he at this new, unforeseen difficulty.’ (*Ibid.*,p.84) と驚く Oswald の態度は、明らかに Letty のそれとは大きな隔りが見える。

“I should like to go where we could walk together under tall pine trees, where the bracken grows high and thick, wherethere are mossy banks to rest oneself upon, and a little inn by the roadside with a gabled

roof.”

(*Ibid.*,p.84)

然し、この romantic な要望に對して Oswald が應えたのは、彼女を steamer で Greenwich に連れて行く事であった。斯くして、如何に女性の愛が強くて早くもこの二人のあらゆる事柄に對する stance は、美事に遠く隔たって了って居る事が自明の理となるのである。

## Chapter VI

一旦男女の間に生じた溝は、時の推移と共に益々幅を擴大して行くもので、それに氣付いた時の女性の側の反應は實に多種多様であるが、Letty は次の様な態度を示して、不満を露にする。kiosque での公開音樂祭に出掛けた夫婦の間には、殆んど會話が無く、業を煮やしたかの様に Letty は、“Look at the people. How silent and sad, all of them! Why is it? Why is everyone so sad to-night?” “I wonder if any of them are as unhappy as I am.” (*Ibid.*,p.p.85-86) と自嘲的に言い放って、夫を辟易させるのである。自らの愛情と同量の愛を相手に要求する妻の我儘は、繊細な文學者の神經を厭が上にも壓迫する。

And now he remembered how soon after their marriage it had begun — reproachful generalities, fits of inexplicable irritability, of exacting affection, of studied coldness. They had been married several weeks; how many he scarcely knew, only the old life seemed to receded far, far into the past.

(*Ibid.*,p.86)

考えて見れば、一時の ‘impulsive’ (*Ibid.*,p.87) な衝動に驅られて求婚した自らに落度が在ったとは言うものの、夫の本質を尠しも理解しようと努力もせず、唯執拗に愛を強請する自己中心的な妻の存在は、聽て夫の作家としての能力に影響を及ぼし、創作力の著しい減退を生じせしむ

る結果を招來する。

Since the night when he had asked her to marry him he had done no work. There was nothing strange in this, for, between the outbreaks of work-fever, he had always been accustomed to spend weeks without once putting pen to paper — unbroken weeks of eventless peace, as it seemed to him to-night. But now she was always there, with her air of suppressed discontent, from which he shrank, never meeting it openly, pretending to ignore it. To arrive at an explanation of it he never attempted. The necessary effort, and a vague dread of consequences were more than sufficient to deter him.

It had been a strange thing this marriage of his — a thing so sudden, so impulsive, that, as he thought, he marvelled at it. This woman by his side, her full-lipped mouth quivering with an expression that he disliked — all at once, she seemed no longer near him; but, from a distance, as it were, he was looking at her as one looks upon a stranger — a stranger who had come into his life and who was changing it all for him.

(*Ibid.*, p.p.86-87)

その自分中心の言動に依って、作家である夫の創作意欲を奪い、精神的に恐怖感を抱かせる妻の存在は、*New Grub Street* の Amy Reardon を筆頭に George Gissing の諸作品でも数多く見られるが、Gissing も Hubert Crackanthorpe も、realism 志向の作家として、unintelligent な女性の持つ独特な性向や主張を具に観察する絶好の機会を手に入れた譯で、両者は、共に、妻である女性の強い影響を受けて自滅して行く男である夫の業を追求して居る點で、美事に一致して居ると言えよう。

「以前にも、私と話して居る時に、構想が生まれたと言ったわね。でも、いざ書こうとすると纏まらないとか…さあ話して御覧なさい。私が書いて上げるから。」愛情から發したと Letty が自負するこの様な途轍も無い干渉が、實は、作家である夫の自尊心を非道く傷つけて居ると言う

事實は、この性急な二人の結び付きが誤ったものである事を如實に證明して居ると言えよう。

They had left the gardens and were walking rapidly down the main hall, *she, her face lit up to excited radiancy, he, preoccupied, frowning a little.*

(*Ibid.*,p.89 Italics は筆者)

## Chapter VII

翌朝眼を覺した妻は、夫が既に書齋に籠り、朝食も晝食も要らないと召使に命じて居た事を知って、‘… dreamed that they were together on a desert island and that he was loving her in a new, wonderful way.’ (*Ibid.*,p.89) と、無理矢理自らを納得させようと努めるのだが、いざ孤獨に食事を攝る段になって、昨夜の執筆の手傳いも拒否された事に思い當り、“He mustn't be disturbed.” (*Ibid.*,p.90) と、俄かに突き放された悲哀を實感する。

All at once, tumultuously, her wounded pride rose within her. He did not want her — she, who had loved him — ah! how she had loved him. There was nothing she would not have done for him; and he scorned it all — who was he to treat her in this way? She had thrown herself away on him — he did not care for her, not a bit; a dozen small signs of his indifference occurred to her. *Why had he married her, then?* Oh! why had he made her love him, since he did not care for her? And in bitter, reckless desire for self-inflicted pain, she strove to conjure up all the silly day-dreams she had had about him.

(*Ibid.*,p.p.90-91 Italics は筆者)

創作力の低下に焦燥を感じて、遮二無二執筆活動に没頭したい Oswald の必死の想いを理解することの出来ない Letty の稚拙な思考は、‘*Why had he married her, then?*’ という本質的な疑問に短絡し、“Come to me, my

Oswald, you are the whole world to me.” (Ibid., p.91) と言う、極めて自分本位の我儘な要求に即座に發展して了うのである。確かに「愛」は崇高な精神活動であり、これに勝るものは無い筈ではあるが、これ又創作と言う崇高な目的に邁進する者にとって、*「愛」にのみ耽溺して居る譯には行かないのは自明の理であって、この點に於ける Letty の認識の甘さが、夫を悲劇の淵に追い込む結果をもたらすのである。*

一方、夫は創作に呻吟する。

With Oswald hour after hour was slipping by — only the scratching of the pen, and the tick-tick of the clock. How good he felt, as two or three times he leant back, stretching his arms, back to the regular grind after the nerve-exasperating idleness of the past weeks! Then he would turn to again.

(Ibid., p.92)

思う様に進まぬ筆に苛つき乍らも、一方では書齋に逃避する事に依って妻の束縛から暫し解放されて、思わず ‘the exhilaration of new-found freedom’ (Ibid., p.92) を満喫する夫は、秘かに散歩に抜け出して、夕暮の爽やかな大氣に接して、 ‘his brain, lazily drinking it all in, sank into a delicious torpor.’ (Ibid., p.93) と生氣を取り戻すのである。此處に到って、遂に、Oswald と Letty の間は、妻の切望する唇齒輔車の状態から遠く乖離して了ったのである。

## Chapter VIII

Oswald Nowell の絶望が昂じて、遂には死を予感するに到る章である。一ヶ月餘りを閲して、夫婦間の乖離は益々進み、會話は絶無に近く途絶え、食事に同席することも尠くなって、妻はあれ程熱中した讀書の習慣すら捨て去って居る。夫は今では公然と終日書齋に籠り切りとなり、二人の接點は皆無の状態となる。偶に食事を共にする際にも、夫は妻の scrutiny を感じて ‘uneasy’ (Ibid., p.97) となり、それが度重なるにつれ

て恐怖すら憶える始末、そして、遂に、或る夜夕食時に家を抜け出した夫は、薄汚れた食堂で孤獨な食事を撮って居る時に、不圖戸口に妻が立って居る幻影を見て、半失神状態に陥って了う。執筆活動の停滞と、妻に対する必要以上の拘泥から、重度の鬱状態に追い込まれた夫の姿は、作家と謂う藝術家の持つ脆弱な精神状態の一典型とも言えるであろう。遂には寢室迄別にする程全くの他人同様になって了った事に對して、勝氣な妻は意識して意固地を張り續け、日毎に疲弊して行く夫の行動を黙殺する事で、自らの pride を堅持し續ける。

And as time went on the thought of death began to haunt him till it became a constant obsession. In the daytime, fascinated by it, he would lay down his pen and sit brooding on it; at night, he would lie tossing feverishly from side to side, with the blackness that was awaiting ever before him. And with the sickly light of the early morning, there met him the early relief of having dragged on one day nearer the end.

(*Ibid.*, p.p.99-100)

將に、‘the end’ の日一日と近付いて來る状況を回避する精神力は、最早殆んど残って居ない夫の姿が vivid である。表面的には作家としての創作力の枯渇故に死を想う Oswald ではあるが、内面には上述の様な Letty の無言の壓迫が存在して居る事実が明らかであり、二重の pressure に苦悶する藝術家としての Oswald の存在は、realistic な事実として、肯定し得るものと言えよう。

## Chapter IX

All day he had been writing, squandering in a sort of fierce delight the last desperate rally of his brain, and now that he felt his strength to be running low, *goaded himself on with pililess obstinacy.*

(*Ibid.*, p.100 Italics は筆者)

衰え行く創作力を ‘*pitiless obstinacy*’ を振り搾って持続させ、漸く書き上げた原稿を、夕食の卓子で読み返し、その内疲労を憶えて僅かの間轉寢をした後、不圖氣が付くと、何と妻がその原稿を引き裂いて居るのを目撃した時の夫の驚愕は、想像に餘りあるものと言えよう。

A long while, a short while, he know not which, and consciousness began to return. A white lable before him — a half finished pudding. He was alone; she had gone. The manuscript! — surely he had had it in front of him. Where is it? — gone! He looked up, and the first thing that met his glance was Letty, her face half turned away from him, evidently unaware that he was awake, on her lap the manuscript. Presently the crackling sound of crumbing paper, next, the harsh noise of tearing; she was tearing it, *slowly, deliberately*. Then again and again; it was with a sort of frenzied *fierceness* that she was tearing now, and the fragments were fluttering on to the floor. She stood upright, and quickly, without heeding him, went past.

(*Ibid.*,p.p.102-103 Italics は筆者)

夫から自分を奪ったと勝手に邪推して憎んでも餘りある原稿を ‘*slowly, deliberately*’ と破り捨てる妻の嫉妬の激しさを眼のあたりにした夫は、唯、‘It was dead; she had killed it — this was the end.’ (*Ibid.*,p.102) と、夫婦の關係の完全なる終焉を自覺する。全く平靜さを失って、妻の後を追った夫を待ち受けて居たのは、唯只管夫への變らぬ愛と、それを裏切った夫に對する妻の呪詛の言葉とであった。

“Oh, God! Merciful God! Listen to me; hear me. Almighty God! They say that Thou helpst people who are in trouble. Surely it cannot be much to Thee just to help me. Dear God! (here she began to sob) I cannot bear it any longer, indeed I cannot. Bring him back to me, God, just for a moment. I wanted him. Oh, how I wanted him! And I will give up my whole life to Thee. I swear it, my whole life shall be Thine. I have

been wicked, very wicked in the past. Give me this one thing, and I will do whatever Thou wishest. Almighty, merciful God, say that Thou wilt help me.”

(*Ibid.*,p.p.103-104)

“Oswald, my Oswald, come back to me. Oswald, Oswald, my husband, speak to me — oh, speak to me, just one little word. What have I done that you will not speak to me? *What is it that has taken you from me?* Oh! I want you, I want your love. Oswald, my Oswald, I cannot live without it. Come back to me, come back to me. I cannot bear it any longer. It is killing me. Oh, it is killing me. If only it could be.”

(*Ibid.*,p.104 Italics は筆者)

“*What is it that has taken you from me?*” という疑問こそこの音で愛のみ至上とする Letty が、自らの行爲に對して何の反省も抱いて居ない證左であり、それが結果として夫を奈落の底に突き落す最大の原因となると斷じて然るべきであろう。

## Chapter X

作家として、又、夫として、總てに疲弊し切った Oswald Nowell が、‘the peace of death’ (*Ibid.*,p.105) を實行する最終章である。吊り橋の鐵柵の間から、下を流れる河へ身を投げようとしたが、柵の間隔が狭くて果せず、支柱を掴んで天邊へ攀じ上った彼の見た河は、‘the water black, cold, slimy’ (*Ibid.*,p.105) そのものであった。入水後浮き上るのを恐れた Oswald は、道傍の道路工事用の石を拾って pocket に詰めようとする。

As he looked round him to see if he were observed, his eyes fell on a heap of flints a few yards off, where the road was under repair. He went up to it, and stooping down, began, with *the feeble slowness of an old man*, to fill his pockets with the stones.

(Ibid.,p.105 Italics は筆者)

‘*the feeble slowness of an old man*’ という描寫には、實際ののろのろした行動の裏に、精神的肉體的に疲弊の極に達した人物の自動的に緩慢となって了った全人格の象徴が隠されて居ると思えてならない。吊り橋の天邊で、多分眩暈を起したのか、‘*a blackness filled his eyes.*’ (Ibid.,p.105) と、目指した河とは反対側の道路上に轉落して、絶命する結果となるのである。

Hubert Crackanthorpe 自身も、後年 the Seine に身を投げて自殺するのだが、作家として第二作目のこの作品に於て、部分的に自らが投影して居る hero に同じ行動を取らせて居るのは、偶然ではあろうが、極めて暗示的であり興味深い。作品の title 通りに、將に、‘egoism’ の衝突そのものと言えるこの一篇に左っては、前作 *Profiles* に於いて自分自身の衝動の故に轉落の道を辿る一女性 Lilly を描いたのに對し、夫と妻とを眞正面から對峙させ、後者の様々な壓力に屈して前者が破滅すると言う、謂わば、hero も heroine も共に活寫しようと務めた點に、この作家の進歩が見て取れそうである。そして、知的で神経質な男性と、平凡ながら自我の強い女性との、夫々が保持する ‘egoism’ の相容れないが故に生ずる葛藤を圖式的に描出しようとした作家の意圖を汲んで置きたい。悲劇的な人生の終焉を迎えざるを得なかった Oswald Nowell には、George Gissing の勞作 *New Grub Street* (1891) に登場する、矢張り知的で内向的な Alfred Yule の次の言葉を贈って、最初から思惑の異なる結婚を戒めつつ、その靈を慰めたい。

Many a man with brains but no money has been compelled to the step. Educated girls have a pronounced distaste for London garrets; not one in fifty thousand would share poverty with the brightest genius ever born.

(George Gissing : *New Grub Street*, ch. VII)

Text: WRECKAGE, WILLIAM HEINEMAN, LONDON, 1896

この論考は平成14年度札幌大學研究助成制度による研究成果の一部である。